

きょくほく たみ
極北の民エスキモー

エスキモーは、北極圏に沿った7000キロ以上の広大な地域にちらばって暮らす複数の民族の総称です。

彼らは、グリーンランド(デンマーク領)、ロシア、アメリカ、カナダのそれぞれ一部、計4つの国にまたがって暮らしています。その中のカナダ・エスキモーの人びとを「イヌイット」と呼ぶこともあります。



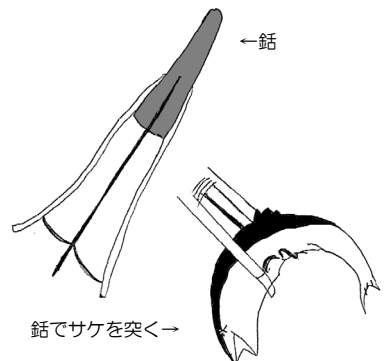
*エスキモーの居住地域

エスキモーの伝統的な食生活は狩猟によって得た生肉が中心です。アザラシやセイウチ、クジラ、カリブー(トナカイ)などの大型海獣・動物、サケやマスなどの魚を捕獲していました。寒冷な気候のために植物採集によって栄養を得ることは困難ですが、その代わりに生肉を食べることで、ビタミンCやビタミンDといった栄養を摂りました。もし、エスキモーの人びとが肉を煮たり焼いたりして食べ続けたら…必要な栄養が摂れず、病気になってしまうかもしれません。

くふう
工夫された漁法

エスキモーの人びとは海の生き物を捕えるために様々な工夫をしてきました。例えば、大型のセイウチやクジラなどは、錨につなげたロープに抵抗となる浮き袋をつけることでスピードと体力を奪い、つかまえやすくします。

サケやマスはおとりと錨を用いて捕らえます。おとりはセイウチの牙や骨でてきており、小魚の形をしています。おとりを水中で泳がせることでサケをおびき寄せ、狙いを定めて錨でしとめます。サケを突く錨は、独特な三つ又の形をしています。中央の鋭い針がサケの胴体を刺し、その左右につけられた針がサケの胴体をがっちりとかまえて離さない仕組みです。



錨でサケを突く→

★ここで紹介した道具は、狩猟採集コーナーに展示してあります。どんな道具が実際に見てみましょう。

さいしゅうしゅりょうみん

採集狩猟民ムブティ



ムブティは、アフリカ中央の森林地帯、コンゴ盆地^{ほんち}北東部のイトウリの森に約 3～4 万人住んでいます。

背が低く、男性は平均^{へいきん}145 cm前後、女性は 135 cm前後であるため、ピグミー（小さい人）とも呼ばれてきました。家族 5～20 からなる、バンドという^{きょじゅうしゅうだん}居住集団をつくり、森の中で移動^{いどうせいかつ}生活を送っています。

森棲みの民

ムブティは、野生のイモ類^{やせい}、キノコ、木の実などを採集^{さいしゅう}し、弓矢^{ゆみ}や網^{あみ}を用いてダイカー、サルなどの小型動物^{せうけいどうぶつ}を狩猟^{しゅりやう}します。網を用いた狩猟をネット・ハンティングといい、蔓^{つる}の内皮^{ないひ}を編^あんで作った高さ 1～1.5m、長さ 40～100 m のネットをつなぎ合わせて円形に張りめぐらし、動物を追いたててネットに絡^はませてつかまえます。ゾウなどの大型獣^{おおがたじゅう}を槍^{やり}でしとめることもあります。蜂蜜^{はちみつ}も重要な食糧^{しょくりょう}で、ハニー・シーズン（蜂蜜の季節）と呼ばれる 4～6 月には、食物の 70% が蜂蜜でまかなわれます。

森の外との関係

イトウリの森の近くにはムブティだけでなく、農業^{のうぎよう}を営^{いとな}む人びとも住んでいます。ムブティは彼らと共生的^{きょうせいせいき}関係を形成し、8 月から 11 月の雨季の間、ムブティは森を出て農耕民の畑仕事を手伝って生計をたてています。狩猟で得た肉や蜂蜜を農作物と交換したりもします。ムブティは、かつては独自の言語を持っていましたが、現在はその言語をなくしてしまい、近くに住む農耕民の言語を借用して使っています。またムブティは、歌やダンスが上手なことで有名です。

イトウリを含めたアフリカの森林は、1990 年代から外国企業による開発が進み面積が大きく減少^{げんしょう}しました。森の近くを伐採^{ばっさい}会社のトラックが走るようになり、モノや人がひんぱんに出入りするようになりました。過度な伐採^{かど}の影響^{えいきよう}で環境破壊^{かんきようはかい}が進んだ土地もあります。森の民のくらしは、森の外—私たちを含めたグローバルな関係の中で変わりつつあります。